

キルギス共和国と日本

会員 丸谷憲二

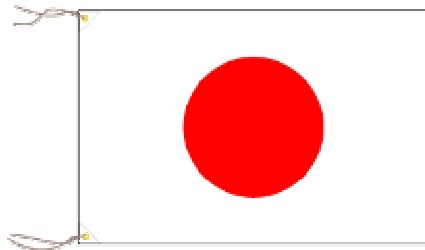
1 はじめに

日本(Japan)の国旗と一番似ている国旗は、キルギス共和国(Kyrgyz Republic)である。

キルギスでは「大昔、キルギス人と日本人が兄弟で、肉が好きな者はキルギス人となり、魚を好きな者は東に渡って日本人となった。」とされている。キルギス人と日本人は顔がそっくりである。在京キルギス大使館の開館は平成16年4月22日である。



赤地に黄金の円



白地に赤の円

2 キルギス共和国

キルギス共和国(キルギス=黠戛斯)は、中央アジアにある旧ソビエト連邦の共和国。首都はビシュケク(旧名フルンゼ)。かつてはキルギスタン(黠戛斯坦)が用いられた。北からカザフスタン、中華人民共和国、タジキスタン、ウズベキスタンと国境を接している。ソビエト連邦から独立したウズベキスタン、カザフスタン、トルクメニスタン、タジキスタンとともに中央アジアを形成し、独立国家共同体(CIS)加盟国である。



クルグズ(キルギス)の語源は「кырк(クイールク)」が40の意味で、40の民族を指し、また中国人にかつて「гунны(グンヌイ、匈奴)」と呼ばれていた背景から、それらを合わせてクルグスとなった。テュルク系言語で40を意味する「クウルク」に、娘や女の子を意味する「クウズ」をあわせた「クウルク・クウズ」は、“40人の娘”という意味になる。中央アジアに広く伝えられるアマゾネス伝承との関連をうかがわせる。したがって、「40の民族」というよりも、「40の部族」ないし「40の氏族」という意味になる。

2.1 キルギス共和国の古代史

『史記』などの古代中国の歴史書に名前が見られる堅昆(けんこん)が、キルギスの名で記録された最初の民族集団である。彼らは南シベリアのイェニセイ川上流域で遊牧生活を行い、匈奴に服属していた。その後、同じ地域にいた契骨(けいこつ)もやはりキルギスの名を記録したものである。唐代には黠戛斯(かつかつし)として記録され、はじめ突厥(テュルク)、のち回鶻(ウイグル)に服属していた。840年に

決起してイェニセイ川から南下し、回鶻を滅ぼした。しかし、回鶻に代わってモンゴル高原を支配することはできず、その後もキルギスの名を持つ集団はイェニセイ上流域に留まった。13世紀にチンギス・カンがモンゴル帝国を建てるとこれに服属した。キルギスが突厥の支配下に入るのは6世紀である。

- 1世紀頃 - 匈奴の支配下に入る。
- 6世紀 - 突厥(テュルク)の支配下に入る。
- 7世紀 - 唐の支配下に入る。
- 8世紀 - 回鶻(ウイグル)の支配下に入る。
- 9世紀 - 回鶻を滅ぼす。
- 13世紀 - モンゴル帝国の支配下に入る。

2.2 キルギス共和国の国旗の由来

中央に輝く太陽と、キルギス人の移動式住居「ユルト」の天井を象っている。太陽が放つ40条の光は、国民を構成する代表的な40の部族を表わしている。

3 日本国の国旗の由来

日本では聖徳太子が遣隋使に託した文書以来、自国を“日出ずる国”とする考え方があり、赤い日の丸は日の出の太陽を象徴している。また紅白は日本の伝統色で、めでたいものとされており、赤は博愛と活力、白は神聖と純潔を意味する。

3.1 国旗国歌法

日の丸は古来から用いられてきたが、かつては法律によって明示的に定められたものではなく、長い間「慣習」として使用されていた。明治3年1月27日制定の商船規則で船舶の識別旗として日の丸が定められたが、この法律には日の丸が国旗であるとは明記されていなかった。その後、平成11年8月13日に公布・施行された国旗及び国歌に関する法律によって、公式に日の丸が日本の国旗であると定められた。

4 まとめ

現在のキルギスの65%が日本人に顔つきが似ているキルギス人である。残りの35%はロシア人やウズベク人などの白人種である。秦氏の出身地である弓月国はキルギスのすぐ北方にあった。西暦650年頃に滅亡している。秦氏はキルギス周辺から日本へ渡来している。キルギス人は、突厥族やモンゴル族のアジア系の遊牧民族の末裔である。キルギス人が日本人と顔つきや背格好が似ているのは当然である。

5 追記「東突厥斯坦共和国」

大井 透氏から平成23年9月7日に「中国の新疆ウイグル自治区」に関して下記のメールをいただいた。

東トルキスタン共和国 現在の中国の新疆ウイグル自治区を、漢字で書くと東突厥斯坦共和国 トルキスタン である。

東トルキスタン共和国(ウイグル語: شەرقىي تۈركىستان جۇمھۇرىيىتى、Sherqiy Türkistan Jumhuriyiti)は、テュルク系イスラム教徒によって、20世紀前半に中華民国の新疆省であった中央アジアの東トルキスタン地方において樹立された政権。

歴史上2度にわたり、それぞれ別々の地域を拠点として樹立された2つの政権があり、いずれも一定の期間東トルキスタンの一部において実効的な独立政権を実現した。現在はアメリカ合衆国に東トルキスタン共和国亡命政府の本部が2004年9月14日にワシントン置かれている。

東トルキスタンには、古くはインド・ヨーロッパ語族の言葉を話す人(アーリア人)が居住していた。タリム盆地の辺りには古くは疏勒、龜茲、焉耆、高昌、楼蘭などの都市国家が交易により栄えた。しばしば遊牧国家の月氏や匈奴などの影響下に入った。

前漢の武帝の時代に匈奴が衰えると今度は前漢に服属し、以後は北方の遊牧国家(突厥)と東方の諸帝国(唐)の勢力争いの狭間で何度か

宗主が入替わった。タリム盆地の都市国家郡は7世紀までは存続し、以後は数百年かけて徐々に衰退していった。一方、タリム盆地の北に位置しモンゴル高原の南西にあるジュンガル盆地には、古来より遊牧民族が暮らしており、主にモンゴル高原を支配する遊牧国家（匈奴、突厥）の勢力圏となっていた。しかし、突厥の支配時代にテュルク系民族集団の鉄勒の中からウイグル（回鶻）が台頭し、8世紀には突厥を滅ぼした。この時期のウイグルは、タリム盆地、ジュンガル盆地、モンゴル高原など広大な領域を勢力圏とし、多くの部族を従えたため、ウイグル可汗国と呼ばれている。ウイグルの影響力は絶大であり、安史の乱等ではしばしば唐を助け、婚姻関係を結ぶなど関係を深めた。

ウイグル可汗国は840年に崩壊する。これによって、モンゴル高原より逃亡したウイグル人は天山山脈北麓に天山ウイグル王国を建国し、同時期に別のテュルク系民族がタリム盆地にカラ・ハン朝を興した。この結果、東トルキスタンの住民は、次第にテュルク化に向かい、カラ・ハン朝がイスラム教に改宗すると、イスラム化が進んだ。

6 参考文献

- ① 『世界の国旗図鑑』
<http://www.sarago.co.jp/idxrgon.html>
- ② 『世界100カ国の旅 キルギス』
<http://semaru.jp/kirugisu.htm>
- ③ 『在京キルギス大使館の開館』
http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/enzetsu/16/etc_0422.html
- ④ 『キルギス人と日本人 日ユ同祖論』
<http://www7a.biglobe.ne.jp/~mkun/nazo/Kyrgyz.htm>
- ⑤ フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』